

## 史談

2010 (H22) 10・15

## ■ 文化財巡り 江口 儀雄

9月28日火曜日。あいにくの雨。白鷹町町長選挙戦の始まりの日で、その喧騒を遁れるようにバスは出発した。

はじめの研修は寒河江市郷土館。西村山郡の郡役所と郡会議事堂を寒河江公園に移築したもので、現在は郷土資料館として利用されている。初代県令三島通庸が郡区編制法が公布されると、ただちに建設にとりかかったもので明治11年(1878)12月に落成している。大工棟梁は富樫伊久助で、県の若い係官が西洋建築雛形という書物を見ながら監督したという。郡会議事堂は明治19年(1886)8月に建てられたもので、どちらも見応えのある洋館であった。



寒河江の慈恩寺では彼岸花の群生が私たちを出迎えてくれた。寺伝によると、神亀元年(714)諸国を行脚していた僧行基が寺を構えるに良

き所と京都に帰り、聖武天皇に奏上し、天平18年(746)婆羅門菩提僊那(来日したインドの僧)によって開山されたという。本堂は元和4年(1618)に山形城主最上氏によって再建されたもので、国の重要文化財になっている。郷目右京進貞繁の白馬と栗毛の絵馬を見て、内陣にて説明を受ける。目の前には、本尊前仏の弥勒菩薩、阿弥陀如来、聖観音菩薩、持国天、多門天などの仏像が立ち並んでおり、わずかな時間とはいえ直にまみえることが出来て有難かった。薬師堂内の薬師如来、脇侍の日光菩薩、月光菩薩の三尊像、そして後陣に並んでいた十二神将を見入る。薬師三尊像を護っている十二神将は甲冑を纏い、今にも動き出すような力強いものであった。それに比べると菖蒲薬師堂の十二神将はこけしのようにかわいい神将であり、これも好きな仏像である。

大井沢にて昼食。大日寺は天長年間(824-34)空海によって開かれたという。応永年間(1394-1428)に道智が置賜から大井沢を結ぶ道「道智道」を開削し、中興の祖となった。天文7年(1538)勢真によって再興され、湯殿山別当寺四ヶ寺の一寺として、湯殿山参詣の拠点となった。江戸中期、大井沢の大日寺の参詣者は年一万人を数え、「湯殿まで笠の波打つ大井沢」と歌われるほどの賑わいを見せた。明治元年(1868)の神仏分離令によって、大日寺は寺号を廃し、所蔵の仏像は各地の寺院に譲って神社となった。明治36年(1904)火災が発生し、多くの伽藍は焼失した。雨に煙る境内を散策しながら、杉の切り株に生えたスギカノカを採った。その後、湯殿山を参拝し、本道寺の湯殿山神社をめぐる。

ふだんは拝むことができない仏像を拝観することができ、有意義な一日であった。

■ 守谷英一氏が『箒を作る』(私家版)を出されました。長井市の金井神地区の箒作りについて、聞き取り・調査の結果を64ページの冊子にまとめたものです。問い合わせは守谷さん、TEL (85) —0371 まで。

## ■ 五・一五事件の首謀者 三上 卓の書 3 樋口 利夫

三上卓氏の墨書の多くは、私見としては漢詩的語句を色紙、短冊にしたためたものと思っている。とくには佐賀藩士の道を示した「葉隠」（江戸前期の武士道論書）や、禅の言葉の中にかくされた想いは土の香りであったり、大自然の無限の善なるものへの畏敬を含んでいることは、感じとれるのではないだろうか。とりわけ佐賀武士の思想の核であった「武士道とは死ぬことと見つけたり」などはいつの世の人にも言い得ることではあるまいか。

宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ……」は日本人なら誰でも一度は声に出して読んだものかと思われる詩である。三上氏の賢治への深い想いであり、多分「農」への景仰(けいぎょう)でもあろうか。



賢治が特別に「農は国の大本である」と言ったか、どうか。賢治の農学への三上の景仰が出たところでふと思いついたことは、新渡戸稲造に「農本主義」が書物としてあると聞いたことがある。また最近、『亡国農政』なる新刊書がでたことも思い出した。農本主義を標榜する団体もあったが、いずれにしても三上氏と新渡戸稲造との関係などは兄からは全く聞いたことがないが、新渡戸への関心はあったのではあるまいか。 (続)

### ■ 歴史講演会を開きます。

- ・ 日時 11月5日 1時30分から
- ・ 場所 中央公民館 大会議室
- ・ 講師 高橋 拓氏  
「十王焼のルーツについて」

## ■ ウルシかぶれ 8

ハゼの木を実際に見る機会がないと思っていたら、貝生の工藤君の庭先に立派なハゼがあった。聞くところでは盆栽を買い求めたものが大きくなり、しかたなく地面におろしたものが大きくなったのだという。

ハゼの葉は紅葉が美しいことから数本を林立させて盆栽に仕立てられていることは知っていたが、4～5メートルにも成長したものは初めて見た。秋には実がびっしりつき、ヒヨドリが群れて食べにくるという。屋敷に植えてかぶれたりしないかと聞くと、折れた枝などに素手で触れなければ大丈夫だというが、彼らはもともとそうした体質なのだろう。



写真を見ても葉の付き方はシンジュによく似ているが、軸がヤマウルシのように赤みを帯びている。幹の枝ぶりは、やはりウルシの形である。シンジュとの違いは葉っぱの臭いでわかるが、かぶれる人は触らないことである。

ネットで見ただけなのであまり信じられないが、生産地では原料としてのハゼの実が不足しているのだという。今もハゼの実からはロウソクや石けんなどの良質の二次製品が、いろいろな工夫を重ねて作られ、販路を拡大してきたが、ここにきて元になる原料が足りない事態になったのだという。そこで今まで採集されなかったハゼの木に目をつけ、急に実を採集し始めたというのである。

これからハゼの木を育てて間に合う話でもあるまいが、なんとも奇妙な話である。(川)